

氏 名	なかにし ひろし <b>中西 啓</b>
学位(専攻分野)	博 士 ( 学 術 )
学 位 記 番 号	博 乙 第 1 8 2 号
学位授与の日付	平成 23 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 題 目	<b>他者との関係性における象徴形成過程から分析するデザインの 提示と受容のされ方に関する研究</b>
審 査 委 員	(主査)教授 中川 理 教授 石田潤一郎 教授 並木誠士

## 論文内容の要旨

本研究の目的は、さまざまなデザイン行為における矛盾や困難さについて明らかにし、それを精神分析等の手法を用いて、デザイン行為に関わる主体相互の象徴形成過程の中で説明することである。

デザインは、それに関わるさまざまな立場の人々の間に、いわば第三者として形成される、文化的・社会的・歴史的存在としての創造活動としてとらえられる。したがって、他者との関係における困難さが人間を形成するように、デザインも他者との関係における何らかの困難さによって形成されると考えられる。しかし、科学的・定量的分析の手法では、その困難さは許容範囲の誤差として全体から解消してしまおうとするのが一般的である。そこでこの研究では、そうした困難さこそに着目して、その原因に遡って読み解くことによって、困難さを解消ではなく回収しようとしたものである。

第 1 章では、実際の展示イベントを事例として、そこでのアンケート調査の結果を手がかりに、展示対象に関わる側（実行委員会）と展示を見る側（鑑賞者）との関係を分析した。そこにおける困難さの主因として、結界の必要性をめぐる衝突があることを明らかにした。第 2 章では、博物館における実際の展示デザインをめぐって、展示する側（研究者）と展示対象に関わる側（デザイナー）との関係を、それぞれの言説を手がかりに分析した。そこには、ある事項について展示を見る側に理解させようとする二者にとって、展示を見る側による誤読という困難な事象があった。そこで、二者による展示対象象徴化の過程を分析した。第 3 章では、作品のオークションの事例において、展示する側（出展者）と展示を見る側（応札者）の二者による価値付けが一致しないにもかかわらず交換が成立するという経済学的矛盾について、実際の交換成立に至る過程での二者の価値付けの無意識的側面を分析した。第 4 章では、発展史における叙述について分析した。発展史では、事物の創始が中心にして叙述されるが、終焉について多く叙述される場合、叙述の整合性に矛盾をきたす。その困難さを、歴史叙述における因果関係の説明の妥当性・主観性の観点から明らかにした。

このように本研究は、人間による創造活動としてのデザインの諸側面における矛盾や困難さの原因について読み解くことによって、デザインの形成において隠されてきた可能性の一端を示すことができた。

## 論文審査の結果の要旨

デザインは、それを提示する場面で生まれる人間相互の多様な関係の上に成立する。したがって、デザインの行為には、その関係の中でさまざまな矛盾や困難が生じることになる。本論文は、従来のデザインに関する議論では、ほとんど扱われてこなかった、そうした矛盾や困難さに着目し、それを分析しようとしたものである。しかし、デザインの提示に関わる主体相互の関係は、定量的な分析にはなじまない。そこで、本論文では、主にジャック・ラカンの精神分析理論に立脚し、人間相互の関係性に発現する象徴形成過程の分析から、その矛盾や困難さを明らかにしようとしたものである。

ただし、本論文は定量的分析を否定しているわけではない。矛盾や困難さが何であるのかを特定する過程では、主に統計的処理を用いた客観的な分析が行われている。実際の展示イベントにおけるアンケートやオークションにおける落札結果、あるいは歴史叙述における年代と記述頁の関連などについて、緻密な統計学的分析が行われている。そして、その結果から判断される矛盾や困難さについて、改めて、人間の無意識における象徴形成過程を説明する精神分析の知見を援用することで分析を行っている。分析の対象となるのは、デザインを展示する側、展示に関わる側、見る側の三者であるが、その中のそれぞれ二者間の関係に着目する、展示やオークション、叙述など4つの事例の検証を行っている。

分析の成果としては、それぞれの関係性における矛盾や困難さは、受入れざるを得ないもの、あるいは出会い損ねる価値などとして明らかにされるが、いずれもその場面において遠ざけられるものとして括ることができるとしている。各事例での象徴形成過程の分析には、まだ充分ではないと見られる箇所もわずかにあるが、こうした、一般的には些細なこと、解消すべきことと判断されやすい、矛盾や困難さに着目し、その存在を明確にしたことは、デザインという行為のあり方を考える際にきわめて有益な研究となっていると判断できる。

なお、本論文の内容は、以下の学術学会誌の査読論文として公表されている。

1. 中西啓、「言説分析による芸術展示デザインのパレルゴン析出の試み」、日本デザイン学会誌、第53巻第4号、pp31-38、2006年
2. 中西啓、「博物館展示においてデザイン学領野が曖昧である原因を析出する試み」、日本デザイン学会誌、第55巻第3号、pp. 63-72、2008年
3. 中西啓、「言説分析によるデザイン史叙述の背景にある困難さ析出の試み」、日本デザイン学会誌、第55巻第6号、pp95-102、2009年
4. 中西啓、「芸術展示における展示する側および展示を見る側の無意識的価値のある量的比率関係について」、日本デザイン学会誌、第57巻第2号、pp. 93-100、2010年